

ヅラ 日州 オホスケカヅラ 筑前 ビランジキ 江州 山野共ニ多シ 略○中

増○中 又南五味子ノ莖ヲ切テ水ニ浸ス時ハ粘汁出ヅ、コレヲ以テ束髪ノ用ニ供スレバ、膩垢ノ患ナク且ツ髪ヲ長ズ、

〔倭名類聚抄<sup>二十</sup>葛類〕五味 蘇敬本草注云、五味和名作福加豆莢 皮肉甘酸、核中辛苦、都有鹹味、故名五味也、

〔物類稱呼<sup>三</sup>草木〕五味さねかづら 大坂にてびじんさうといふ、東國にてびなんかづらといふ、出雲にてとろ、かづらと云、伊勢白子にてくつばと云、土佐にてふのりかづらといふ、又さねかづらの實、則藥物の五味子也、相州底倉邊にて五九の伊と云、

〔和漢三才圖會<sup>十二</sup>支體〕髪

今婦女梳髪以五味蔓浸水粘液塗之、則髪出艶而鞏焉、

〔鹽尻〕五味葛をもて、今の男女盛に髪をかたむ、是も中世よりせし事とぞみえたる、頃日は三州某の谷、びなんかづらを取つくしけるとぞ、京師難波東都はさら也、所々の都會、および田舎の末まで、婦人は用ひざるはなしとかや、是も一時の妖艸といふべきにや、

〔嬉遊笑覽<sup>一</sup>容儀<sup>下</sup>〕五味子、髪を結ふに、びなんかづらとて、南五味子の莖を水に漬し、そのねばり汁を用ゆ、○中 色芝居草子に髪はそほろの時より、丁子油、山吹ねり、さねかづらは干あがりて、から蝨ナメ

蛭クダのはふたやうに、きら／＼して見苦しきと紙漉のとろ、をつかはせ云々、○中 かくいへりしも廢れて、今は久しく成ぬれど、近頃まで、油店の看板に、かづらの束ねたるを置たりしが、それもいつか皆うせて、唯兩替町なる下村の店にのみ、もとの儘におしろいの看板の上のせて有り、そのあるじに尋ねければ、今も稀には、これを求めにくるもの有とぞ、

〔歴世女装考<sup>四</sup>〕さねかづら

近世にいたりては、五味子さねかづら 藤ののまのうにをみちかく切て、筒に水を入れて刺浸おけば粘汁出るを、